

001 健

No.	読書日 2010年	タイトル	著者 出版	表紙	コメント	評価
1	0615- 0619	運命の人 〈一〉	山崎豊子 文藝春秋 1,600円 (古800円)		1972年5月沖縄返還が実現する前年、1971年の沖縄返還協定にからむ機密文書(米軍負担部分と発表された費用を肩代わりする密約)を入手した毎日新聞社政治部の西山太吉と情報源である外務省事務官の女性秘書が国家公務員法違反で有罪となった事件をモデルに事件の発端から沖縄機密漏洩事件のあらまし、裁判の経過、主人公および家族らを取り巻く周辺の運命の変転を著者持ち前の取材力で真相に迫り今なお続く沖縄の基地問題の悲劇、事実を知る権利を優先し国家の欺瞞を暴いた記者が焦りから犯した誤りで国家権力から叩かれ家族をも引き裂いた悲劇の運命を描いたもの。	
2	0620- 0624	運命の人 〈二〉	山崎豊子 文藝春秋 1,600円 (古800円)		著者は毎日新聞大阪本社の学芸部出身であるだけに当時の新聞社の景や内情など臨場感のあるものとなっている。主人公などは実名になっていないが周辺の政治家などはそれと分かる仮名を用いているので当時の政治家の勢力図や思惑なども描かれていて現在の勢力図になっていく過程が覗えて興味深い。	
3	0624- 0626	運命の人 〈三〉	山崎豊子 文藝春秋 1,600円 (古800円)		沖縄が核抜き本土並みを唄い文句に返還された時、自分は社会人2年目で素直に喜ばしく思ったが裏では本書以上の密約(核の再持込など)が米国の機密解除文書より発見されており返還されたあとの基地についても米国の欲するままに協定が結ばれており外務省の外交下手、隠蔽体質とシラを切り通す図々しさは救いようがない。	
4	0627- 0630	運命の人 〈四〉	山崎豊子 文藝春秋 1,600円 (古800円)			
5	0701- 0703	吉野北高校図書委員会 2	山本渚 MF文庫・ ダ・ヴィンチ 550円		若かりし頃、本が好きだったこともあり現実的な職業選択の一つに図書館の司書があった。本屋で見るとタイトルとほのぼのとしたイラストに惹かれ1巻目を読んだ情性で購入。基本的には恋ネタで軽い読みやすい。会話の中にもっと図書ネタを入れることを希望。	

6	0704-0708	吉野北高校図書委員会 3	山本渚 MF文庫・ダ・ヴィンチ 550 円		<p>本書の図書委員は1・2年のクラスから選ばれて昼休み、放課後の貸出し業務を行う設定になっている。自分のところの高校の実態は忘れてしまったが受付係は見かける生徒が多かったから委員が決まってもその中でも本好きの人間が率先してやっていたようだ。自分の高校時代は文学全集発刊のブームで順次発刊される図書の貸出票の一番目になるよう競って借り出したものだ。</p>	
7	0710-0714	プラチナデータ	東野圭吾 幻冬舎 1,680 円		<p>国民全員のDNAを登録することにより犯人の特定を容易にし検挙率をあげることを目的にDNA法案が可決される。これにより飛躍的に検挙率が上がるもののDNA捜査にかからない連続殺人事件が発生する。そして根幹となるDNA検索システムの開発者まで殺害され現場に残された毛髪から警視庁の運用責任者が犯人であるとの解析結果が出る。身に覚えのない運用責任者は逃亡し追う立場から追われる立場へ。そしてDNA検索にかからないDNAデータが存在することに気付く。一言で言えば権力を握ったものはとかく管理システムを作りたがり、質が悪いのは管理する側については特権を作ることだ。</p>	
8	0715-0718	雪と鷺	北村薫 文藝春秋 1,470 円		<p>昭和初期。良家のお嬢様から見た世相を身近に起きた事件をからめて描いたもので「瑠璃の天」「街の灯」に続く三部作の最後を飾るもの。時代の雰囲気がよく描かれていてどちらかというと女性向きの本。探偵役はお嬢様だが真の探偵はお付の万能女性運転手のベッキーさん(仇名)。タイトルの雪は最終作と思えば2・26事件を連想するのは容易い。</p>	
9	0723-0730	あんじゅう 三島屋変調 百物語事続	宮部みゆき 中央公論新社 1,890 円		<p>「おそろし三島屋変調百物語事始」の第二弾。許婚を悲惨な事件で亡くし心を閉ざした17歳のおちかを預かった三島屋の叔父が命じたのが他人の不思議話の聞き役だった。1巻目が出た時、一話一話が長く5話収録だったのでこの調子で本当に百話やるつもりなのかと思ったのが実感。今回も同様。ストーリーテラーなので結構面白く読めるがさして恐くはない。恐怖ものはきれが大事なので短編連作でやったほうがいいと思うのだが。</p>	

10	0804-0809	スタンド・バイ・ミー	小路幸也 集英社文庫 600 円		<p>東京の下町で「東京バンドワゴン」という古本屋を経営する平成の4世代わけあり大家族の近辺で起こるささいで風変わりな事件の数々を解決する中で家族の絆が高まる笑いと涙の物語というのが唄い文句。現在4作が出版されていて本書は三作目。昭和の良きTVドラマへのオマージュとして書いたとの著者の言葉があり登場人物の設定はユニーク。但し、その割には読んでいて面白みがないがキャスティングがうまく決まればドラマの方が面白くなると思われる作品。</p>	
11	0812-0816	再会	横関大 講談社 1,680 円		<p>幼なじみの4人がタイムカプセルにして埋めた拳銃が23年の時を経て再び殺人に使用された。掘り起こしたのは誰か？うそをついているのは？それぞれの思いが重なり拳銃を埋めるきっかけとなった事件の現場に一同が会する時、過去の真実が明らかになる叙実ミステリーもの。いわゆるミステリーのトリックが出尽くしたといわれる現在この手の作品が多くなる傾向にあるので読者に疑問を起こさせるのも手であり解決編ではそれらも納得させる必要がありその点では成功している作品。</p>	
12	0817-0820	プロムナード	道尾秀介 ポプラ社 1,365 円		<p>30代半ばの気鋭の作家の初エッセイ。日経新聞に掲載されたものを中心に作家になるまでの道程、デビューから6年の歳月を独自の視点で切り取った小説家のおかしな日常を綴ったもので氏の作品とはかけ離れた他愛の無い話も豊富。 特別収録として 17歳のときに初めて描いた絵本『緑色のうさぎの話』、19歳のときに初めて文字で綴った戯曲『誰かが出て行く』を掲載。</p>	
13	0821-0822	私が彼を殺した	東野圭吾 講談社文庫 730 円 (古 262 円)		<p>東野作品でポピュラーな加賀恭一郎ものの一作。婚約中の男性の家に突然現れた1人の女性。男に裏切られたことを知った彼女は服毒自殺をする。男は自分との関わりを隠そうとする。醜い愛憎の果て、その男性も毒殺される。容疑者は3人。事件の鍵は自殺した女性が作った毒入りカプセルの数と行方。加賀の「あなたが犯人です」の言葉が最終行で犯人は明かされずに終わる犯人当てミステリー。</p>	

14	0823-0825	変身	東野圭吾 講談社文庫 620 円 (古 175 円)		<p>ある不動産屋の店内で起きた強盗事件。たまたま居合わせた主人公は頭を打たれ即死。ネタバレになるが読めばすぐ想像がつくので書いてしまう。犯人は警察に追い詰められ心臓を自ら打ち抜き自殺する。そして主人公の損傷した脳の部分を犯人の脳で補う移植手術が秘密裡に行われる。倫理上、ドナーは事故者のものとして発表されるが生き返った主人公を襲う自己崩壊。手術後徐々に凶暴な性格が変わっていく恐怖に駆られた主人公はドナーの正体を突き止めようとする。性格が変わっていく恐怖と葛藤を客観的に描いている様は「アルジャーノンに花束を」の主人公を思わせる。</p>	
15	0826-0826	むかし僕が死んだ家	東野圭吾 講談社文庫 560 円 (古 150 円)		<p>何とも意味深のタイトルが興味をそそる。すると今生きている僕は誰？という疑問が浮かぶからだが読み始めるとつい引き込まれて一気に読み。「僕」は正しくは「私」であり元恋人の事。そこには記憶の喪失がからむ謎解きがラストに用意されている。徐々に明かされてゆく元恋人の過去と出来事。適度な緊張感があって面白く読める。</p>	
16	0827-0828	ある閉ざされた雪の山荘で	東野圭吾 講談社文庫 560 円 (古 150 円)		<p>早春の乗鞍高原のペンションに集まったのは、オーディションに合格した若き男女7名。出演への最終試験は雪に閉ざされ孤立した山荘での殺人劇を疑似体験しそれぞれが役割を演出し芝居するというものだった。予期せぬことに一人また一人と消えていく現実には芝居なのか。本当の殺人が行われているのか。巧妙に仕組まれた設定の中で起こる殺人劇の虚・実・虚。今ではポピュラーになっている密閉された空間での連続殺人事件を意識しながらラストを殺人事件とはかけ離れたところに持ってくるあたりが面白い。</p>	